

オーストラリア・ニュージーランドの 幼児教育



津 守 真

オーストラリアとニュージーランドというと、遙か遠くの国のような気がしていた。距離からいえば、遠いことはたしかであるけれども、夜、飛行機で発てば、九時間半乗って、翌朝にはオーストラリアのシドニーに着く。オーストラリアから日本を見ると、海を隔てて隣国である。オーストラリアもニュージーランドも、アジア諸国の仲間であって、欧米諸国よりも近い関係である。これは、行ってみて実感として得た認識であった。

去る八月に、私ははじめてオーストラリアとニュージーランドに行く機会を得たのであるが、幼児教育の分野でも、行く前に考えていた以上のことを経験した。旅をするときには、いつでも、考えてもいなかったことが経験できるので、それが楽しみなのであるが、今回は、幼児教育の分野の中の新たな発見があったので、そのことについて記したい。

私自身が見ることができた幼稚園が六園あり、グループの他の人たちがいったところを合わせると、十五園にのぼるので、オーストラリアとニュージーランドの幼児教育の全貌を見ることできたといつてよいのではないかと思う。どこの幼稚園も小規模なので、いちどきに大勢の見学者が入らない

ように、四、五名乃至十名位に分散して見学できるように、それぞれの市の教育委員会当局で配慮されていたので、どこもゆっくりと見学することができた。また、どこも、子どもも遊んでいる傍に自由にいれてもらい、子どもも極めて自然に遊んでいて、気持のよい見学をすることができた。次に、全体を通じての印象と感想をとりまとめ記したい。

まず第一に、どの幼稚園も小規模で、子どもたちは大たい一日中（といっても、午前または午後の半日であるが）ゆくりと遊んでおり、先生も落着いてゆったりと動いていたことである。最近何度かアメリカの幼稚園を見て、小グループのコーナーを自由に使ったものでありながら、その内容にはかなりいろいろのプログラムがせり合っていたのと比べて、オーストラリア、ニュージーランドいずれも、かなり徹底して自由な遊びを重んじていることは印象的であり、見ていても、安心した落着いた気持であった。子どもたちは幼稚園に來たときから、自分で遊びを見つけて、ある子どもは積木を並べ、ある子どもはフィンガーペイントをやり、タイヤの池で水遊びをやり、戸外の運動具によじ登り、ままごとをする

など、ゆっくりと動いた。かならずしも単元のようなままとまりがあるとも思えず、ひとつひとつの遊びがたいせつにされているようであった。

この点、二十五年前に、私がアメリカの幼稚園で実習していた当時の米国の状態がこれに似ていたように思う。むしろそれよりもっと、あせりがなく、ゆっくりとした印象であった。これは、まだ都市も少なく、世界の文化の中心ともなっていない土地柄もあるのだろうか。私はシドニーの街を歩き、港の近くの美しい海と空の見えるダウンタウンを歩いてみたとき、米国の西海岸に似ていながら、人々の様子が何かに似ているように思った。アメリカのようなきびきびしたところがない。植民地の気安さともいうのだろうかと思ったりした。

幼稚園の室内は、低い戸棚などを用いていくつものコーナーに分れ、それぞれに、布や紙、手糸などの廃物材料、こわれた機械の部品、えのぐ材料、ねんど、木工その他の材料がおいてあること、庭には自然木を利用した遊具や小屋などが作られていることなど、今世紀前半に盛んだった新教育の原型を見たような気がして、思わず目をこすって、もう一度目を見開いて見たことも何度かあった。草原や林の多い土地で

あるので、庭が自然の緑に恵まれ、かなり広く、海を見下す芝生であったり、庭が立派なところが多かった。(写真1・2)

第二に、こうしたよく遊べる幼稚園を作り上げるのに、幼稚園の指導者たちの努力を各処に見ることができたことは、こういう全体にのんびりした土地において、印象的であった。どの土地にいっても、子どもの遊びの教育を守るために、背筋をのばして、悠然と頑張っている婦人達の指導者の姿があった。シドニーの教育養成大学で案内をして下さったミス・ハリソン、その幼稚園の主任のミス・ニュートン、ニュージーランドのオークランドで六つの幼稚園にわれわれを依頼し案内する役をとって下さったその地域の幼稚園の指導主事のミセス・グランディッシュ、ロトルアで三つの幼稚園にわれわれを送り込んで下さった地域の指導主事、いずれも、忘れ難い風姿である。

オークランドで、午前中の幼稚園の見学を終えて、中華料理店で昼食をとったときのミセス・グランディッシュのはなし。ニュージーランドで、幼稚園の子どもが一日中遊ぶことを教育と考えるようになったのは、はじめからではない。二〇年前には、もっと時間で区切られた、構造化した教育をしていた。キンダーガルテン・アソシエーションに、ミス・

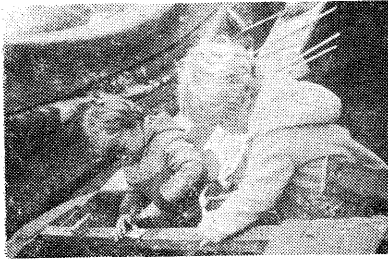
クリスはか数名の熱心な指導者がいて、子どもの遊びのたいせつさを説き、次第にこうした教育が普及するようになったのである。行政面で何ら決定的な措置があったわけではない。行政当局も、自然にこういう保育がよいことだと考えるようになったのである。こういう話をするとき、物静かな落着いたミセス・グランディッシュの口調が熱っぽく多弁になるのを感じた。この人は、このような教育が軌道に乗ってから、幼稚園教育に従事するようになったとのことであった。詳しいことは、いまウェリントンにいるミス・クリスにきけばわかるとのことであった。これらの指導者たちは、会話の中で、*the whole child, the social, emotional and intellectual development* というような話をよく用いた。日本だと、社会的、情緒的、知的発達などというと、書物の上で学ぶ抽象的なことに考え易いが、この人たちは、それがすなわち、幼児の遊びの姿そのものであるというように考えていく、この両者は切り離せないもののように思えた。

幼稚園の現場には、母親たちがかならず手伝っていたが、その母親たちと話してみたときも、こうした幼稚園での自由な遊びが、子どもの発達にとって最善のものであることを、心から納得して、子どもの遊びを見ている様子であった。

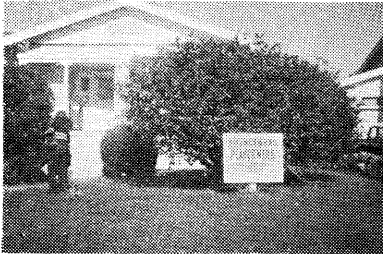
▼写真1 庭にある自然木の遊具



▼写真2 庭で木工をする子ども



▼写真3 マンガワウ・プレーセンター



ロトルアで、幼稚園訪問に出発まで少し時間があって、ホテルのロビーで指導主事と話をしていたとき、だれかが「それでは、幼稚園は小学校への準備をするのですね」といったら、直ちに、「ノー、小学校への準備ではなくて、ライフ（人生）への準備だ」と、自信に満ちて答えたことは、何かごとんと響いた感じであった。忘れることができない。

幼稚園の普及、発展にとって、キンダーガルテン・アソシエーションがこれまで指導的な役割を果たしてきたらしいことは、いろいろの機会に知ることができた。オーストラリアの

シドニー幼稚園教員養成大学の幼稚園で、そこで用いている机、椅子、教材などは、どこから買うのかという質問に対して、この大学自体、オーストラリア・プリスクール・アソシエーションと密接に関連していて、この大学で工夫考案したものを、プリスクール・アソシエーションの販売部で製作販売し、そこで作ったものをここで買うのであるということであった。帰る日に、そのプリスクール・アソシエーションの販売部にわれわれは立寄ったが、そこでこのアソシエーション及びオーストラリアの幼稚園の歴史を記したパンフレット

がないかとたずねたところ、残念ながらないという返事であった。「われわれは、そういう書物を作らねばならないのだが」といって、オーストラリアの幼稚園の設置規程のようなものを記したパンフレットを教えてくれた。一ドル一〇セントで買ってきた。(ニュージーランドのキンダーガルトン・アソシエーションとオーストラリア・プリスクール・アソシエーションとは別組織である)

第三に、幼児の保育施設に対する政府の援助の仕方である。とくに私に印象的だったのは、オークランドのマンガワウ・プレーセンターである。(写真3)普通の家を改造して作られたこの建物と土地は、政府が買って、地域の親達に運営を任せるといふ仕方だった。といつても、中心になる指導者格の母親がいて、数人以上の母親が保育者をつとめていた。子どもも母親とのびのびと愉快そうだった。ガレージは父親達により、子どもたちの木工場に改造されていた。この母親たちが、週一回の夜のクラスに参加して、一〇週間を一区切りに勉強できるようになっている。三段階あって、三〇週を終えると、プレーセンターのリーダーの資格がとれるのとこのことであった。私が話していた母親は、もうじき三〇週を終えてリーダーになれるといつていた。幼稚園が満員で入れ

ないので、プレーセンターのシステムができたといつていたが、こうしてやってみると、幼稚園でやっていることは、このプレー・センターでみたされるので、もう幼稚園にゆく必要は感じていないとこの母親はいつていた。この日の午後、オークランドのノースショー・ティーチャーズ・カレッジにいったとき、その先生の話では、プレーセンターが母親達の精神衛生に果している役割は甚大なものがあるといつていた。子どもの育て方をどうしてよいか分らない母親達が、ここで子どもとの遊び方を学んで、それによって精神の安定を得ている人は沢山いるとのことであった。そういえば、ここで甲斐がいく動いていた母親の何人かは、楽しそうに子どもにもふれていたが、その表情は幸福そうには見えた。

政府は、こういう家と土地を買って地域の親達に与えるが、その地域で必要がなくなったり、建物が老朽化したら、それを売って、また新たな土地に家を買ひ求めるのだそうである。親達の力を信用して援助をするという政府の考え方に私は感心した。そこで見学しているときにはごく当りまえに思えることが、日本にひき移して考えてみると、途方もなく大変なことに思えた。これはどうしてなのだろうか。

第四に、教員養成のことである。年限は短大であつて、そ

の点は不十分であるが、音楽や芸術を通して、学生自身の人間性の向上を目標とするということで、一本の筋を通してすることは立派だと思った。当然、音楽教室や美術教室は数も多く、設備も整っていたし、学生が自分で調べて勉強できるライブラリーがととのっていることはうらやましく思った。子どもに教えるための知識や技術よりも、学生が自分自身の向上や、自分自身の趣味を伸ばすことが、子どもの教育の上になんかたいせつなことかとあらためて考えさせられた。これも簡単なことのようにでありながら、日本の大学でなしえないことである。

第五に、子どもの観察の逸話を二つ三つ。

《マンガワウ・プレーセンターで》一人の女の子が、かなり高いところに渡してある板を渡ろうとしていたが、一人ではわたれない。最初、私が出しても拒否したが、三回目くらいから、私の手につかまって渡り、はしまでくると、私が抱いて上からとびおりさせてやると大喜びする。もっとやってくれというように、私の方をみて、一〇回以上もくりかえす。そのうちに、片手だけ支えてやると一人でとびおりる。もう帰りの時間になって、家の方から呼び声がする。さっき私と話をしていた母親がよびにきたが、子どもがやっている

姿をみて、明らかにかなり急いでいるのに、数回やりつづけてからつれてゆく。私とふれていた短時間に、この子は、板を自分で渡れるようになったことはうれしかった。また、母親が呼びにきて、母親自身、明らかに、自分を制して、子どもにやり通させたことは、夜の講座を受けているだけのことがあると思った。

《ノースライド幼稚園で》大きなタイヤを半切にした池に水をいれて、青色の染粉を加えたところで、何人もの子どもが水をいれたり出したりしてあそぶ。先生が、じょうごや容器をもってくると、遊びは一層活発になる。女兒Xと男児Yが並んで水をやっているところに、別の男児Zがきて、YとXの容器に水をいれると、Xは、「わたしだけに入れてちょうだい。Yちゃんにいらてはいけない。私だけに。」という。それから、何かの拍子にXとYに水がひっかかった。すると、「あなたがやった」「You did!」と何回もい合う。二人とも笑っている。こういうやりとりを楽しんでいる。ゆっくりといい合いを楽しむ風景で、こういうことが、いくらでも、あちこちで起っているのだらうと思った。これが、ゆっくりとできるところに、何でもないようなことながら、一日中遊べる幼稚園の大切な点があるのだと思った。